

「敬語」考

— 「日本語表現」授業の現場から

中 村 龍 兵

How students learn “Honorific language” in Japanese

NAKAMURA Ryuhei

1. はじめに

まったく新しい「社会文化学部」で、なり立てのシロウト「教授」が初年度に受け持った科目が「日本語表現」だった。それは何を教えるか、また教え得るか？

ここでカマトトぶったことを言うてはならない。言うべきではないのである。大学が新しい学部の開設認可を文部省に申請し、その教員陣の一人に私を入れ、その私が何を教えるかは文部省にちゃんと届け出てある。「日本語表現」という科目名はそのときに生まれている。また、学生諸君に配ったシラバスには、1時間ごとの授業内容まで事細かに明記してある。それをこの期に及んで、何を教えるかなどと腰の引けたことは口が裂けても言うべきではないのである。

そしてまた、本人にもそれなりに成算がなかったわけではない。教員になる前の仕事として30何年間か新聞記者として働いていたので、その間は日々文章を書いて暮らしていた。勤めていた大きな新聞社では、新聞記事を書く仕事のほかに、管理職的な仕事、事業を企画し運営する仕事、一般的な事業会社としての渉外的な仕事…と、いろんな職種があるのだが、どういうわけか、たぶん他にやり柄がないと見られていたせいだろう、あまりそういうところには回されないで、30何年間、ただ日本語の文をひねり出す仕事に終始した。

だから、その体験を活かして学生たちに文章の書き方を教えることは出来るだろう、と大学は見てくれたのだろうし、文部省（の審議会）の教員審査も通ったのだろう。また、新聞記者の古手になったころ、さる私大で5年間非常勤講師として作文（ここでは「国語表現」という科目名だった）を教えたこともある。

学生諸君へ履修科目登録の参考にしてもらうための事前に提出したシラバスは、これら

の経験をもとに作成した。ただし、このシラバスが実際にはそのまま運営されることはま
ずないであろうと、作成のときから思っていた。大筋では変わってはいないつもりだが、
各時間毎の計画となると、ほとんどその通りには運営されていない。

これは、私の「日本語表現」の場合だと、そうならざるを得ないと思っている。「出来
るだけ多くの文件を読み、出来るだけ多く文章を書く機会を作る」というのが、まあ今
言った「大筋」だとすると、その「文件」を、私は出来るだけ最近の新聞記事、および私
の目に触れた雑誌、書籍から抜粋して学生に提供することになっている。A4で1—2枚程
度にコピーできる長さの「文件」である。したがって、授業時間のせいぜい前日あたりに
何を読むかが決定する。それで、授業が実際に行われる1年も前に書くシラバスには詳細
を書きこめない。

こうしたシラバスの運営は問題があるとされるかもしれない。そもそもそれはシラバス
とは言えないと言われるかもしれない。「文件」とはやはり「文献」であるべきであり、
古典（クラシック）とは言わないまでも、書籍の形にまとまったものを数ページないし数
十ページ読ませておかねばならないと。ああ、それが出来ればどんなに良いだろうと私も
思う。だが、学生たちが予習することなどほとんどない、指定した文献を学生たちが十分
に借り出せるほど備え付けられていないという日本の大学の現状を言うまでもなく、それ
を今言うのは非現実的と言うほかない。

そもそもシラバスとは一と、今ここで「シラバス論」を展開するほど知識があるわけ
ではないし、その余裕もないが、私としては、あるアメリカ大学教育の体験者から聞いた、
「シラバスは毎時間配られる。だから1セメスター終わる毎に全体としてのシラバスが完
成する」といったのが本当かどうか、それが一般的なのかどうかとも知らないが、そうした
もの、つまり「事後シラバス」のほうが納得がいく。

こうしたことは、科目の性格によってもさまざまなバリエーションがあり得ようと思え
る。数学者で学校教育にもさまざまな発言があり、日本の戦後期の教育(今はまだ「戦後」
ですか?)に影響を与えた遠山啓による教育の分類、つまり、ある一固まりの知識を教え
込む「自動車教習所」型と、その過程自体を楽しむ「劇場」型の教育に分けるとするな
ら、大学教育の中にも「自動車教習所」型の科目と「劇場」型の科目があり得るのではな
いだろうか。前者ならシラバスは当然、「事前提示」が馴染むであろうし、後者の場合は
「事後完成」というケースも生じると思う。

私の「日本語表現」授業運営に即して言えば、毎授業時間の初めに「『日本語表現』の
ためのノート」として、その時間のねらいを簡単に記したA4のプリント1枚を配ってい
る。スペースがあれば「文件」のコピーもこれに載せる。これが私としては授業時間毎の
シラバスのつもりで、1セメスター終われば、通し番号順にこの「ノート」を並べるとそ
のセメスターの講義の流れがほぼ分かるようになっている。ただし、記述は簡単だから、

講義に一切出ずにこのプリントさえ集めれば良いというわけには行かない。眼目は学生に毎回何かを書かせるというところにあり、その提出がなければ成績の評価はしない、すなわち得点は与えない。評価はこのふだんの提出物のみにより、各セメスターごとの試験は行わないから、出席して課題を提出しないと単位は取れない。

ついでに言うと、私は出欠の管理そのものはしない。しかしこの方法だと、学生のほうからすれば事実上、毎回出欠を取られているのと同じで、欠席は少ない。今年度前期の例でいうと、科目登録者74人で毎回の出席率は9割を超えていた。後期は前期に引き続き登録しているものが多いので、この私のやり方に慣れたせいも、出席率はやや落ちた。しかし登録70人で毎回の出席者は50人あまりで推移している。この原稿を書いている段階では計算していないが、7割以上、8割近くになるだろうか。

うかつというか、私はこの効果をあらかじめ考えていなかった。前期の毎回の出席が9割を超えていたころ、教室の外ですれ違った学生に「君たちは熱心だね。良く出席するね」と声をかけたら「先生の授業は出席を取るでしょ、だから…」と言う答えが返ってきて、そうか、これは出欠の管理を綿密にやっているのと同じか、とあらためて気づき、何か自分が狡猾な手段を弄しているような感覚にとらわれた。

以上のことは、とくに自慢している（自慢にもならないか？）わけでも何でもなくて、学生たちの協力が比較的得られて、授業がスムーズに進んでいることを、経験の少ない教員としてはホッと胸をなでおろしていることを報告したまでである。

それより私が満足しているのは、始める前にはかなり心配した「私語」の蔓延がほとんどというより全くないことである。用意してきたことを訥々と一方的にしゃべる以外、芸がない—あの手この手で学生の関心を引き付ける手立てを持ち合わせない私としては、ひところ盛んに問題になっていた「私語」が教室の常態になった場合、たちまち立ち往生するハメに陥るだろう。新聞記者をしていたころ、私語の発生が少ない授業をするセンセイとして知られていた、ある国立大の教養科目担当の理系の先生から、落語の本を読んで勉強したり、私語が発生し始めたらタイミングを見計らって突然大声を張り上げて注意を引き付ける、といった「秘訣」を聞いた経験がなまじあったりしたものだから、そのようなことはとても実行できそうにない私としては、私語で授業の進行を妨げられることを実はいへん恐れていたのである。

幸いなことに「日本語表現」の時間で、それに悩まされた経験は皆無である。もちろん時として授業の本題に入る前に、教室の中のどこかで局地的におしゃべりが盛り上がっていて「そこ、うるさいな。少し黙っててくれ」と言いたくなる程度のことは時々はある。しかし我慢して話しつつ、流れがついてくるといつしか収まってくる。少なくとも私がキレてしまって話が続けられなくなるという事態に陥ったことはまだ今のところ経験がない。このあたりのところは多少個人差もあるかもしれないな、と想像している。さっき挙

げた程度の私語の発生でも、神経質な人だと、その時点で細かく注意し、そのことでかえって泥沼にはまるかもしれない。私は幸い、その点鈍感なのか、あまり気にならないほうである。

話が少し横にそれた。問題は、年間通じて、あるいは1セメスター毎に綿密な計画を立て教えるべき内容や到達目標がはっきりしていない性格の科目（「日本語表現」はそのような性質の科目だと私は心得ている）としては、どのような授業運営を考え、工夫してきたかということである。

内容の上下、表現の巧拙の差はあれ、曲がりなりにも大学に入ってきた学生たちはそれなりに「書き言葉による文章表現」は一応出来る。したがって、それを初歩から身に付けさせることは問題にならない。日本に来て短期間日本語の学習をしてきただけの中国人留学生でも、私の見た限りほとんど特別な配慮を必要としない。日本人学生で漢字の知識を含め語彙の不足に問題を感じることも無きにしもあらずだが、それは要求水準如何である。一通りのことは出来るのだから、あとは練習を積み重ねていかにそれをブラッシュアップするかである。書き言葉での語彙不足は読む体験の少なさから来るものだ。だから、すでに書いたように「出来るだけ多く読み、多く書く」が「日本語表現」科目の目当てだと私は考えている。

もう一つ、この科目に要求されるものがあるとすれば、それは1年次配当の科目として、大学教育への導入としての役割だと私は考えている。それはとくに大学から要請されたことでもないし、教授会や学科会議で話し合ったものでもない。ただ私が勝手にそう心得ているというだけである。入学したばかりのフレッシュマンたちは大学では何をどのように学習するか手探り状態のはずだ。その人たちに何をどう教えるか、また教え得るか、学生たち同様、教員のフレッシュマンとしての私もまた、手探りを続けることになる。

考えたのは、まず何より学生たちの興味をいかに引き付けるか、ということだ。非常勤講師としての若干の体験のほか、アカデミックな蓄積にも乏しい新米教員としては、学生に対して「私の提供する知識をまず受け取れ」と言いきる自信はない。具体的に、先にも述べたように講義が「私語」のアラシで迎えられたとして、それを突っ切っていくほどの用意は私には欠けている。話術の才能も訓練も持ち合わせが無い。ここはやはり内容で勝負するしかない。

学生たちの興味を引き付けるといっても、それは何も学生に迎合することではない。表面的な大衆文化、具体的にはTVの番組に現れるようなゴシップやスキャンダル的话题などを講義に織り交ぜて…というようなことは今の「大衆化した」学生といえども個々には関心は多様であり、必ずしもみんなに「ウケる」とは限らない。第一、そのような話題は私自身が最も不得手であるし、学生たちもまた私からそのような話を聞こうとは思っていない。あくまで「日本語表現」という知識の枠の中で、学生が知りたいと思い、深いとこ

ろで思考をするような話題。それを探りたいと思った。

前期の授業では、いちおうシラバスで用意した話題、たとえば「手紙の書き方」「原稿用紙の使い方」「句読点の打ち方」「日本語の歴史と抱えている問題点」など、いかにもそれらしい問題を関連書のコピー使って縦糸にし、新聞のコピーを使っていわゆる時事的な問題も扱った。その中には「森首相の『神の国』発言」「17歳」などを使っている。

先にも言ったように、毎回の授業で「何かを書かせる」ことがこの講義の重要な眼目である。そのつどの講義内容、提供した「文件」について、原稿用紙1—2枚程度の作文をしてもらうか、その時間が取れないときは、メモ用紙程度の紙に講義の感想など内容は何でも良いから私に「手紙」を書いてくれということにしている。これは出席の管理、成績評価の手がかりになるのは先に述べた通りだが、何より学生たちの授業への反応を知り得る。大教室での講義では、どうしても一方交通になり勝ちである。不十分ながらこうした方法で学生の反応を知ることで、「双方向」の可能性が生まれ、それはやがて授業の進行も変えていく。

前置きが長くなったが、本題の「敬語」についての授業はこうした学生たちの反応を探る中で生まれた。

2. 「敬語」問題の発見

「敬語」というのは、たしかに「日本語表現」の授業にふさわしいかっこのテーマである。今はそう思っているが、私としては苦手な、敬遠したいテーマでもある。これは各個人の生まれ育ち、社会的体験の違いによって大いに感受性の異なることだと思うが、世代というのも関係していると後で調べていくうちに感じた。それで言うと、「今の学生たちの言語生活で、『敬語』の問題が大変重い」。これが、私にとっての「発見」だった。

前期授業の後半になってから、ある時間で「日本語」の現況についての二つの新聞記事を取り上げた。一つは文化庁の世論調査で、いわゆる「ほかし言葉」を取り上げたもの。もう一つは米川明彦・梅花女子大教授が『朝日新聞』の文化欄に寄稿した文章で、「集団語」について論じたもの。

この日の授業のねらいについて、私はただ新聞に取り上げられた「日本語」の諸相について話すつもりだった。毎回毎の「シラバス」には、ただ「資料 日本語あれこれ」とだけ記し、新聞記事コピー2枚が貼り付けてある。

米川教授の「集団語」というのは、教授自身の書いたものによれば「警察・国会・銀行・病院…。これらの機関はしばしば新聞ネタとなっている。問題を起こしたところに共通するのは、自分に都合の悪い事実は隠し、秘密にすること。そして人間が相手なのに物のように扱い、金・地位・権力・学歴をタテに見下しがちになることだ」とし、これらの集団で使われる、いわば「隠語」のこと。同教授は数年がかりでこうした言葉を集め

『集団語辞典』を作ったという。なかなか刺激的な言葉が例として挙げられていて、例えば病院では、ドイツ語のステルペン（死ぬ）を使って、患者が死ぬと「ステる」と言うのだ、銀行では大切な客は「MV（most valuable）先」と言うが、普通の客は「マス先」と呼ぶなどという例が挙げられている。

「ぼかし言葉」は「良かったかな、みたいな…」と断定を避ける口調。話し相手との人間関係を気遣う表現で、20台では半数が使っている、と調査で分かったというもの。

私としては、いずれもこういう言葉が使われる世相を学生がどう思うかという作文を要求したのだが、多くは、ひどい「集団語」に憤慨するもの、それに「ぼかし言葉」については「私も使うが、言葉は変化するもので、別に良いではないか」といった作文を書いたものが多かった。

ただ少し私にとって意外だったのは、文化庁の調査で「国語は乱れているか」という問いがあり、これについて触れて、具体例として「敬語」の使い方について悩んでいることを言う学生が多いことだった。高校までの「国語」で習ったのか「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」などという専門語を使って論じるものもいた。

つまり、「国語（日本語）の乱れ」と世に言われる問題について、学生たちは十分に意識しており、それが自分たち若い世代のことを言っている、それも具体的には敬語がうまく使えないというところに原因がある、と認識しているらしいのだ。

これは私にとって本当に意表をつかれる発見だった。それは私個人の「国語（日本語）観」にも関係がある。「国語（日本語）」などと今表現しているように、この問題についての私自身の中にいわば<ゆらぎ>がある。世間一般には「国語」という言い方が流布しており、それは例えば学校教育の中での教科の名前としては「国語」と呼ばれていることにも表れている。しかし、私自身はある種の規範意識の強い「国語」という呼称に疑問、というより強い反発を感じて、もっと客観的ないし科学的な意識から「日本語」と呼ぶべきであると思っており、少なくとも大学教育においては「日本語」であるべきだとしている。現に担当しているこの科目を「国語表現」でなくて「日本語表現」としているのもその意識からだ。<ゆらぎ>とさっき言ったが、その<ゆらぎ>は、私自身の信念の中にあるのではなく、私の信念と世間一般に流布している（させられている）呼称との間にある。

学生たちの「敬語」への強い関心は、私自身のこうした考えからも私にたいへん興味を持たせた。すなわち、私にしてみれば規範意識の強い「国語」観の一つの表れとして「敬語」尊重の気風があると思っているのだが、「日本語」一般のさまざまな問題—たとえば、「ぼかし言葉」とかいわゆる「ラ抜き言葉」など—については、言語の当然な変容の一つだとして許容する意識が強く、若い世代としてそれを規制する動きには強く反発して論じる学生たちが、こと「敬語」については、たいへん素直に「知識が不足している」と認

め、「もっと知らねばならない」と言い、学生によっては「学校教育の中でもっと教えるべきだ」とさえ論じる。それは何故なのか？

興味を引かれて、その次の時間に「敬語」についてのエッセイを一つ読ませ、私の考え方を話して、課題として「言葉づかい」一般についての作文を学生たちに書いてもらった。予期どおりたいへん面白い文章が集まった。大学に入ってから意識した「方言」の問題一話し言葉の地域差一について書いたものもあったが、ほとんどは「敬語」のことを書いていた。

「言葉づかい」についてという題にドキッとした。いつも、母などに注意されるからです。

中学のとき、部活動の先輩に敬語を使ったぐらいで、あとは、ほとんど使わずに過ごしてきました。今、バイトで接客業の仕事をしています、お客さんに対する言葉づかいがいまいち分からなくて、時々、困っています。言葉づかいは、本当大切だと思いました。人に対する印象もちがうし、自分の気持ちを伝えるための一つの方法でもあるし。けど私は、日本語は少しむずかしすぎるのではないかと思います。「敬語」「尊敬語」「謙譲語」などいろいろありすぎて、どういう時に、どういう相手に使うのかよく分からないし、そういうことを考えていると、しゃべれなくなってしまうような気がします。現に今、私は、バイトの先輩とうまくしゃべれません。言葉に気を使いすぎて、自分の言いたいことをうまく話せません。単に私が、今までそういう言葉を意識していなかったのが原因なんですけど。

これから、社会に出ると、もっと言葉づかいに気をつけなくてはいけなくなると思います。じゃないと、自分にいろいろとかえってくるし、社会で通用できる社会人になりたいと思ってるし、そのためには、日頃から、気をつけていかななくてはいけないと考えています。その前に、言葉の勉強をさきにしないといけない気がします。(佐伯由香里)

中国人留学生はこう書いていた。

日本語の本質としての敬語は、表現する形が多いから、私ら外国人にとっては、身につけにくいです。例えば、自分より若い人でも知らない人の場合、道とか聞くときは、尊敬語を使う。私には理解できない。普通「すみませんが」と言い始めれば、その言葉の中に自分の気持ちが入ってるから、充分でしょう。敬語と言え、頭の中にパッと浮かぶのは目上の人に対しての言葉だけです。目下の人には別に敬語とか使わなくても、普通言葉づかいで充分です。中国語はほとんどそうです。

また、日本語の敬語は「お」か「ご」で敬表現するのが多いです。しかも表面的にはと

でも似てますが、意味的にはまったく違います。例えば「御目にかかる」と「御目にかける」という二つの文章を見てみましょう。最初、日本語を勉強するとき私はその二つの文章は自動詞と他動詞の違いと思いました。残念ながら、実際はそうではなかった。それは敬語の問題でした。一つ目の「会う」の謙譲語で、二つ目のは目上の人に見せる意の謙譲語であった。ほんとうに不思議だと思う。こんな形だけではなく、日本語の敬語は場合によって違うから、かなり難しくなる。(朴春梅)

学生たちの文章を読んでいると、その初々しい感受性にいとおしくなって、一人一人抱きしめてやりたくなる。それは私が年を取ったせいなのだろうか？いや、それもあるのだろうが、それよりも、私の若かった時代と比べて、今の若い世代に加わっている抑圧の厳しさを考えてしまうのである。

作文を読んでいると分かるのは、外国人留学生のような問題はさておき、日本人の学生たちが彼らと同じように「日本語は難しい」とネを上げる「敬語」の問題にぶつかるのは、まず高校までの教育で、口やかましい先生にお説教されるとき、そして何より部活動の先輩との間などで、時にそれは「いじめにもつながる」。大学生になってぶつかるさらに難しい場面—それはアルバイト先での体験である。ほとんどの学生がアルバイトを体験し、それも多種多様な職種に就いていることに驚かされるが、ここでは雇用先が先回りしていて、いわゆるマニュアル化した「商業敬語」を学生に教え込む。アルバイトといっても、かつてのように学業を続けるための方便といった、社会人の側からの「大目に見る」視線はもはや無く、一人の職業人としての責任を要求されていることを学生たちは感じている。

私のバイト先は、通信販売の注文を電話で受けるオペレーターなので、今では百貨店でもあまり聞かないような敬言（ママー以下同じ）を使う。例えば「わかりません」ではなく「わかりかねます」、「すみません」ではなく「申し訳ございません」。この言葉のあとには必ず「ご了承いただけますでしょうか」と続くのである。もう少し年輩の人には「そんなのあたり前ではないか」といわれてしまうかもしれないが、たかだか18年しか生きていない私には自然と口にでるまで少し時間がかかった。

これらの敬語は対応マニュアルに載っているが、質問などで自分の考えなどを述べなければならぬ時、「ほんとうにこの敬言であっているのだろうか」と心配になってしまう。普段から使い慣れていない言葉を使ってお客様に分かり易く説明するのは難しい。高校の時の古典の時間にも思ったが、どうして日本の敬言はこんなにもややこしいのだろうか。相手を敬う気持ちがなければ、マニュアル化した敬言では、これこそ「日本語の乱れ」なのではないだろうか。(後略) (隈井奈那子)

アルバイトは、単に責任が伴うというにとどまらず、これが「社会に出る」実質的な第一歩なのだと思われ、学生たちは身構えてしまう。かなり欺瞞的であると嗅ぎ当てていながら、それが「社会」に出ていくことなのだと思います。そして多分将来に待ち構えている就職のための面接のことも思いをめぐらせる…。そこで必要になる敬語はどのようなものなのだろうか。

3. 「敬語」をどう教えるか

学生たちが「敬語」に対して持つコンプレックスの存在、そしてその社会的な由来がぼんやりと見えてきた。前期の授業はそのあたりで終わった。夏休みの間に少し「敬語」の事を調べてみようと思った。そして後期の授業に備えようというもくろみだった。

とっかかりとしてインターネットで、最近日本でも盛んになった「オンライン書店」の検索を使って、敬語に関してどのような本が出ているかを調べてみた。すると、実に多数の、敬語についての本が出版されていることが分かった。それは、「日本語表現」なる科目を教える立場の私が、いかにぼんやりしているか、感覚が鈍いか思い知らされるような結果だった。著書名だけでなく主題のキーワードで検索する方式の「書店」では、実に540冊もの本を挙げていた。

その大多数はいわゆる「実用本」に属するたぐいのもので、冠婚葬祭に際してのあいさつ言葉集にまで及んでいた。日本人の日常の言語生活の中で「敬語」はゆるがせに出来ない、どこか最も重要な部分で、先に引用した中国人留学生がはしなくも書いているように「日本語の本質」なのだ。それも、その知識の有る無しで、生活の浮沈に関わる問題として意識させられている人が多いことを、このおびただしい出版点数は示しているのだろう。私のように、まあ「常識」の範囲でということに済ませ、60年の余ものうのうと生き延びてこられたのは、むしろ僥倖に属すると考えたほうがいいのかもかもしれない。

学生たちの敬語への強い関心の背景に「抑圧」を感じたのはそれと裏腹の関係がある。私たちの世代が彼らの年代だったころ、敬語にそれほどのプレッシャーを感じていたのだろうか？今ではよく思い出せないが、「敬語」がきちんと使えなければ社会に出ていけないといった不安を抱いた記憶はない。

「敬語」についての文献探しは、全部を集めることなどとうてい不可能であることは分かったし、その大部分を占められる敬語マニュアルには私は関心がなかった。結局、比較的よく売れていると思われる新書・文庫版の啓蒙書のようなものを数冊集めてみたが、その多くは「国語学」的な視点から書かれたもので、あまり私の関心—それはいわば社会言語学的アプローチとでも言ったらいいか—に答えてくれそうになかった。ただ、かつて国立国語研究所長を務めていた野元菊雄氏の書いた『敬語を使いこなす』（講談社現代新書）に次のような記述があるのを見つけた。

すなわち、1952年に文部省が発表した『これからの敬語』という文書がある。これは国が戦後初めて公にした「敬語」についての国としての指針で、それにはこう書かれていたという。

- ① これまでの敬語は、旧時代に発達したままで、必要以上に煩雑な点があった。これからの敬語は、その行きすぎをいましめ、誤用を正し、できるだけ平明・簡素にありたいものである。
- ② これまでの敬語は、主として上下関係に立って発達してきたが、これからの敬語は、各人の基本的人格を尊重する相互尊重の上に立たなければならない。

1952年というと、私個人の履歴では中学校に入ったばかりのころで、この文書については習った記憶がないが、それでもこうした文章はいかにも当時らしい気風を伝えていて懐かしい感じがする。野元氏のコメントによれば「戦後の民主主義高揚期にできたもの」ということだが、その時代に育った私たちの世代は、したがって「敬語」などは古めかしい戦前の遺物で、いずれはなくなるとまで言わないにしろ、大幅に簡素化するものと思っていた。そして、やや大げさに言えば、言葉づかいにしても、私たち若い世代がそれを作っていくのだというくらいの気すらあった。何しろこの時期の「国語改革」で、漢字の字体も変わり、カナ遣いも変わったのだが、それについていけない年輩の先生もまだいて、旧字体、旧カナ遣いで黒板の字を書き、悪童たちの嘲笑を浴びたりしていたのだ。

大学に入った1950年代の末ころには「逆コース」という言葉も出来て、何かにつけて戦前の事物が復活したりして「国語」についても、「歴史的仮名遣ひ」の復活を主張する論調もあったが、もはや大勢はくつがえらなかった。だから「敬語」についても、若い世代が、旧時代の言いまわしを知らなくてもそれでコンプレックスを持つようなことはなかった。

やはり野元氏の記述によれば、『これからの敬語』では、自分を指す言葉としては「わたし」、相手を指す言葉としては「あなた」を標準の形とし、敬称としては「さん」づけを標準にして、その他の形には重きを置かなかったようだ、ということだ。さらには基本方針の一つとして「奉仕の精神を取り違えて、不当に高い尊敬語や、不当に低い謙そん語を使うことが特に商業方面などに多かった。そういうことによって、しらずしらず自他の人格的尊厳を見うしなうことがあるのは、はなはだいましむべきことである。この点において国民一般の自覚が望ましい」というくだりもあるそうだ。今の目で見ると、まるで国が先頭に立ってPC（Political Correctness）を呼びかけているようなくすぐったさを感じるが、当時はみんなまじめだったのだなという感慨を禁じえない。

端的な言い方をすると、その後の日本人の気風という点から見れば「国民一般の自覚」は損得勘定とひきかえに、卑屈さに走っていったのだと私などは思う。それが「敬語」への異常な関心を生んだ。「自他の人格的尊厳」などどこへいったのだろうか？

後期の授業は、その前半、「敬語」について集中的に講義することになった。まるでそれを援助してくれるように、どうしたわけかこの時期、これにふれた新聞記事が相次いで出て、おかげで「文件」の種に困らなかった。

9月30日付の各紙は、文相の諮問機関「国語審議会」が、「現代にふさわしい日本語の表現のあり方を検討していた」（『朝日新聞』）結果として、敬語のほかに「敬意表現」の考え方を提唱することを、「表外漢字」「日本語の国際化」とともに委員会試案として発表したと報じた。1952年の『これからの敬語』もこの審議会の建議がもとになっているから、この審議会が48年ぶりに敬語について提言したということになる。

「委員会試案」なるものの原文を未入手で、新聞の報道だけでは分からないところも多いのだが、どうやら『これからの敬語』だけでは、簡素に過ぎて現在の言語生活実態と離れすぎている、そこで新たに「敬意表現」という概念を打ち出した。形の上での敬語だけでなく、「すみませんが…」と断ってから物を頼むのも相手への敬意の表し方だと概念を広げて「敬語」の問題を考えようということらしい。

ぼんやりと私なりに理解したところでは、国語審というところは戦後すぐの「現代仮名遣い」「漢字制限」の大改革のあとは、50年ほどおおむね「逆コース」ふうの現状追認をやってきたという印象である。「敬語」についても1952年の建議は、賛否はあるだろうし、現在の目から見て当時は見えなかった問題が生じているという時代的制約はあるだろうが、哲学ははっきりしている。つまり、国民の意識の「民主化」、具体的には「自他の人格的尊厳」を認め合うための「国語」を作り出すのだという意識である。今度の「試案」にはそんなものは何もない。たぶん、敬語が「商業敬語」のような形に追いこまれていくのを憂慮したということはあるのだろうが、「敬意表現」という概念を打ち出ただけでは、「国語学」的には洗練されたということになっても、民衆の生活には何の関係もない。さきに引用した、通信販売のお客への電話応答というアルバイトをしている隈井奈那子の作文は次のように続けている。

バイト先で「その言葉づかいは何？」というお客様はまだ聞いたことがない。注意できる人も現在では少なくなってしまったのかもしれない。人と人との関係が希薄になってしまった現在では。仕事上位外では敬言をあまり使わなくなってしまったのか…。これはとても悲しいことだ。私たちが次世代に伝えていく敬言の数は少なくなっていくのだろう。

関連して、先に挙げた野元氏のものを含め、3つの「文件」を学生たちと読んだ。その一つは国語審の試案にふれて、国語学の萩野貞樹・産業能率大教授が「異議あり！」として新聞記者のインタビューに答えたもの。（『毎日新聞』11月14日夕刊）萩野教授は「敬意表現」といったように、人間関係の問題に敬語を結びつけるのに反対で、要するに敬語が

きちんと教えられていないだけだという。「敬語はあくまで語彙論の対象だが、それが忘れられ来ている」。「国語学」の専門からは意味のある議論なのかもしれないが、私たちの持った問題関心からははずれている。私も学生たちもあまり理解できなかった。

もう一つは作家、橋本治がやはり『毎日』夕刊の企画「ナビゲート21世紀」に寄稿したもの（9月4日夕刊）で、彼は独特の視点から「これからの日本語にとって重要なのは『敬語への自覚』だ」という。彼によれば「敬語とは他人との距離の自覚で、相手を尊敬するとかに関係なく、その他人と親しいかどうかの表現。丁寧に敬語を使えば使うほど、その相手とは付き合いたくないという意思表示になる」。（敬語の一つ、丁寧語が多く含まれる日本語の標準語は、若者にとって「自分のものではない言語を強要する」から）自分を明確かつ濃厚に語るために、自分たちだけに通用する「若者言葉という方言」を話すようになる…などと独特の感性に基づく敬語論、ひいては日本文化論を展開していた。飛躍が多く、分かりづらい文章だが、感覚的に刺激されるところが多いのか、その日の作文は学生たちのさまざまな「敬語論」が展開されていた。

さて、こう書いてくるとトメドがなくなるが、こうして「日本語表現」の授業は私と学生たちとの作文を挟んでの対話で進行していく。そのあり方が大学の授業として適切なのかどうか、批判を乞いたい。さらにはこの小論のこうした書きぶりが「紀要」にふさわしいかどうかとも判断がつかないが、とりあえず、こんなものが出来ました、そして私は大学教員として幸福です、と今は言うしかない。

(2000.11.30)